

郷土碑文巡り (四)

灘の簡易水道記念碑

会員 山本保

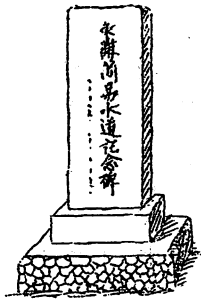
佐伯市東灘、常光庵へ佐伯四町八十八分所第四番札所一ご
本尊大日如來の境内に、次のような記念碑が建てられて
います。
へ碑面の文字

東灘簡易水道記念碑

佐伯市長 出納菊二郎書

へ裏面の文字

佐伯市東灘区は、香近川の河口にありて飲料水に
乏しく、沿岸の井戸は海水浸入し、衛生的悪影響
を来して居ました。時代の進展と共に、又民一
同簡易水道の必要を感じ、再三市に嘆願致し、理
解ある市当局の援助にて、水道施設の運びとなり
ました。総工費百七十万円で、佐伯電設株式会
社の施工することとなり、国の補助金四十二万、



六十万円の起債を仰ぎ、残
額は給水家庭六十七世帯の
負担にて、昭和三十五年三
月竣工せしは、日常生活の
為無二の大事業として、茲
に記念碑を建立し、事業の
概要を記す。

へ側面の文字

昭和三十五年三月竣工

尚、台石に日祭起人中川金次郎氏外二十四人の芳名が
刻み込まれています。

現在、常光庵は老人の憩い場となり、東灘老人クラブ
に利用されています。

県道唯見線が整備されていない頃は、陸路では常光庵
裏の坂道を下り、その峠を越えて、西中浦村大字吹へ
訪れるのが常でした。灘の屋敷から越える、その灘坂も
今、往年の面影はなく、行き来もどたえ、うさぎ道のよ
うに荒廢して、旅人の通路としての価値を、まったく消
失しています。

旧藩時代、東灘・上灘一帯は大江灘と呼ばれ、塩屋村
に所屬していました。参勤交代の船は、西谷角石を出發
し、大江灘を経由して、吹浦から豊後水道、そして瀬戸
内海へと進んで行きました。

また、佐伯市上灘区、元灘小学校の広場に、次のよう
な記念碑が建立されています。

この上灘簡易水道の記念碑は、その姿模倣は、大体
上掲東灘の石碑と同様で、掲載を省略します

へ碑面の文字

上灘簡易水道竣工記念碑

佐伯市長 出納菊二郎書

へ裏面の文字

佐伯市上灘区は、香近川の河口にあつて、飲料水
は塩分多く、市水道の便にも洩れていた。
区民簡易水道を設けんと長らく計画してはが、

此の度簡易水道組合を結成して、日掛野金を起し、新農山漁村特別助成事業による国の補助を仰いで、総工費七百五十万円を以つて、谷川建設によつて昭和三十三年八月二十日着工、南台山本谷の水源地より良質の水を引き、昭和三十五年十月十日完成した。

この簡易水道組合としては、空前の大事業であつたが一致団結してよく此の拳を遂げた。生活改善に對し資するであらう。

尚、工事施工に對しては、特に組合長二田安正氏は、幾多の苦難を克服し、寸暇を惜しみ、常に率先垂範、此の大事業に努力された偉大な犠牲的精神に對し、感謝して居る。

茲に記念碑建設にあたり、事業の概要を記す。

昭和三十五年十月十日

佐伯市上離簡易水道組合

上離簡易水道竣工記念碑の近くには、見事な上離文化センターの建物が完成して、人目を引きまします。時代の流れを、ひしひしと感じさせられます。

月日は流れ、昭和四十八年頃には、海岸地方の西上浦の宮ノ内、狩生、車、風無、二榮。そして大入島の守後・高松・久保浦・竹ヶ谷。更に水立の大中尾・永野・追此の奥、下堅田の小島・竹角・市谷・津志河内下、小津志、上堅田の上城・谷。鶴岡の櫻野等々に、簡易水道施設が完成してまいりました。

福岡市ではつい先日まで、水不足のための給水制限が行われ、市民はあふためて、水のありがたさを、身に

しみて感じました。

大分県でも、いつ水不足が起つて、福岡市と同じような苦しい生活に追い込まれるかわかりません。日ごりから、みんなが水を大切に、そして節約する心がけが大切です。(七月二十三日)

(注)この原稿が居いたのは今から五十日ほど前ですが、水不足・旱害は大変な事になっていて、このような簡易のあった地区は、常に備えおいて置かなくてはなりません。よい調査記録であります。(編集者)

簡語

村里の石垣をながめて 利 栄 弘

本五郎の、山奥の村々を歩くと、あるいは道田に、あるいは段々畑に、見事に高く積み上げられてゐる石垣を見かける。それは、必ずしも巨きな石を用いず、崩れの際土中から掘り出したものを、ていねいに有効に使つての高い石垣で、草一本生えさせずに、長い年月にわたつて守り通し左ものである。

今まで藪であつたところを築いて畑とし、水がかりのよきところ畑は更に掘りあげ、土灰土、小石は小石、大きな石は岸(石垣の俗称)につまうと、それそれ掘りわけておき、岸にはちやんと裏石をつめ、それそれ田や畑に造成していく。水田は土をひるげる前に、水持ちをよくするために、粘土の層を敷きかためる。

それは、骨身を惜しまず働きつづけ、農氏の姿である。たんに村人ばかりかすると、この田畑を、平気で荒らしたイ柄を植こんだりす。

草葉の蔭から先祖たちが、一冬中折角骨折つて畑にしたのになあ——と、ながびてゐるのである。